

経験と知恵の継承



高校生が荒浜小と海岸林を視察

高校生津波サミットに参加している高校生たちは11月26日、仙台市若林区にある震災遺構荒浜小と、海岸林を見学に行きました。

荒浜小は、海からおよそ700メートルの場所にありま。東日本大震災のとき、津波が2階まで押し寄せましたが、児童や先生、近所の人たち320人が上の階に逃げて、27時間後に全員が無事に助け出されました。

高校生たちは4階の展示室で、「3・11 荒浜小学校の27時間」という

ビデオを見ました。地震が起きてから助け出されるまでの、張りつめた様子を体験しました。

荒浜地区には、震災の前におよそ2200人が住んでいましたが、今は家が一軒もありません。高校生たちは、小学校の屋上から周りの景色を眺めて、震災の前にあった町の様子を想像しました。

フィリピンから参加しているランズ・エゼキエル・アリーニョ・デイヴィッドさんは「荒浜の人たちが災

害の中をどのように生き延びたのかという話を聞いて、とても心を動かされました。非常用防災バッグの準備など、普段からの備えが大切だということを家族にも伝えたい」と話しました。

その後、高校生たちは海岸公園センターハウスに行き、震災でなくなった海岸林を元に戻す活動について学びました。震災後に作られた防潮堤も見学しました。

生徒が仙台港で復興を学ぶ



高校生津波サミットに参加している高校生たちは11月26日、仙台市宮城野区にある仙台港中央公園と高砂

コンテナターミナルを訪れました。そこで、塩釜港湾・空港整備事務所の人から、仙台港の被害について話を聞きました。

震災の地震と津波によって、仙台港にある長さ約3キロの防波堤は、その9割が壊れてしまいました。事務所の人は、「海の中の邪魔なものを片づけて、震災から5日目には港をまた使えるようにし、人々を助けるための荷物を受け入れ始めました」と話しました。

高砂コンテナターミナルでは、四つのクレーン全部が使えなくなりました。コンテナは散らばったり、流されたりしました。震災のすぐ後から24時間休まずに直す工事を行い、3カ月後には一部のコンテナ船がまた通れるようになりました。

インドネシアの高校生、プトリ・カニアさんは「日本は防災の知識が豊富で、復興が早い」と話していました。